

市民活動のサポーター

まちネット流山

第28号 2011秋号

まちネット流山は、
流山市の市民活動サポーターです。
流山の市民活動が活発になるように行動します。
行政や企業との連携も進めます。
市民が協力して流山の地域課題を解決します。

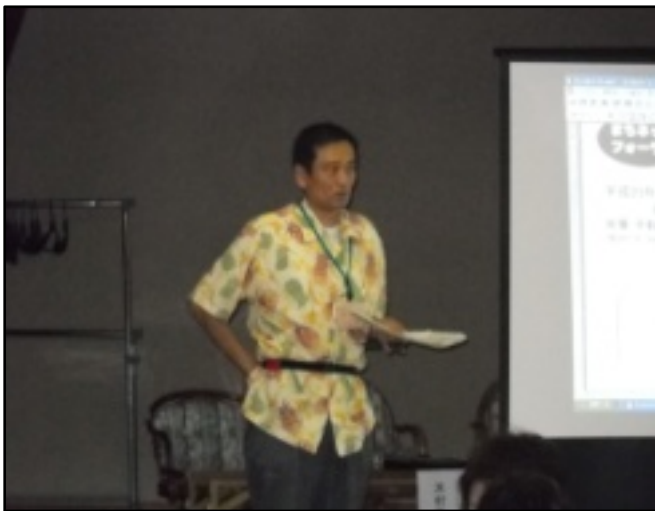
まちづくり協働フォーラム 「NPOがまちを変える」実施報告

6月25日、まちネット流山主催でまちネット協働フォーラム「NPOがまちを変える」が開催されました。

まちネット流山では、昨年から松戸、柏、我孫子の近隣3市の市民活動と市民活動支援の仕組みについての調査を行ってきましたが、今回のまちネットフォーラムでその成果発表を行うと共に、近隣3市から市民活動に携わっている市民団体や行政の担当者をお招きして、東葛地域の市民活動の現状と可能性についてパネルディスカッションを行いました。

近隣市市民活動調査報告

会場の平和台福祉会館は、セントラルパーク駅から徒歩10分くらいのところですが、駐車場が2台くらいしか停められないことと会場が畳敷きのところが難点です。朝からの雨模様でどれだけ集まるか心配されましたが、会場がほぼ一杯になるくらいの参加者がありました。（といっても40名弱ですが）



伊勢委員長の挨拶に続いて、まちネット流山の魚住理事から、近隣市市民活動調査報告がありました。



ここでは詳しい内容は紹介できませんが、東葛地域の3市では、市民団体が中心となって市民活動を支援する仕組みを作り上げてきたところ、行政が中心となって市民活動を支援しているところなど、それぞれの市ごとに特徴があることがわかりました。

共通して言えることは、この10年の間に市民活動支援センターなどの組織を立ち上げて、市民活動を支援する仕組みはほぼできあがってきていることです。一方で、どこの市でも市民活動に参加する市民の高齢化が進行しており後継者を確保することが大きな課題になってきています。

流山市を振り返ってみても、市民活動推進センターという市民活動を支援する中心となる組織が立ち上がり、市民活動団体公益事業補助金制度が整備され金銭的な支援の仕組みもできました。一方で、市民活動の参加者が10年前とあまり変わらなかつたりします。

パネルディスカッション

休憩をはさんで、パネルディスカッションを行いました。少し長くなりますが、パネルディスカッションの様子をご紹介します。



伊勢：それでは、自己紹介NPOの可能性について、各自30分程度をお願いします。

松清：柏市民センターの松清です。オープン以来、スタッフとして活動してきました。NPOは地域社会の多様化に伴う受け皿であると思っています。そのそれぞれが微妙に異なるさまざまな地域活動の中で、活動する住民の選択肢が広がることによって活性化する、そういう位置づけにあると思います。決して特別新しいものができるわけではない、活動のための環境づくりの場であるということです。NPOにはグローバルな活動も、市町村単位の活動もあるが、私たちは市町村単位のNPO活動のサポートを行っています。

小山：NPO COCOT（コミュニティ・コーディネーターズ・タンク）の副代表をしている小山です。今までセンター長をしていましたが、今回から担当理事になりました。NPOの可能性とか、NPOと市民とのかかわりについては正直よく解りません。行政や企業の方が「NPOが社会を変えるんだ」なんて言われると、なんとなくキナ臭いという感じがします。本当に可能性があるのかということについては、日々悩みながらやっています。直接市民と対しながら活動していく中で、個人個人の思いが地域の課題として見えるようにすることが重要ではないかと考えています。それを自分たちの力で解決したいと考える人たちのためにNPOが存在するのだと思います。さらに、それが経済のギアチェンジまでできるようになれば理想です。

小池：我孫子市の市民活動支援課の小池です。H12年に

設置され、私はH12年にここに異動してきて以来、すべての支援事業にかかわり、庁内調整をやってる中で、他部署のNPOに関する意識改革も行ってきました。「NPOがまちを変える」という主題であります。「NPOが」という視点よりも、NPOは地域の生活者がまちに目を向けていくための仕組みの一つであるという観点で捉えることが重要だと思います。言葉遊びではないが、「住民が市民に変わっていく」上でもNPOは重要な位置づけにあると考えます。

木村：流山市民活動推進センターのセンター長をしている木村です。もう一つの顔は、NPO法人市民助け合いネットの理事です。助け合いネットは、片岡代表ら16名の賛同者が発起人となって設立し、7年目となります。その後パートナーシップ21市民会議として参加した後、3年余り現業復帰していましたが、本日司会を務められている紙田さんの後を継いで、今の仕事をしています。流山市民活動推進センターは、最初の2年間は公設公営でありましたが、3年目から公設民営として、助け合いネットが業務を受託しています。NPOの可能性、NPOの活躍により期待される社会像については、後で助け合いネットの事例でご説明します。

兼子：流山市民コミュニティ課長の兼子です。私の課は自治会関連、市民まつりを担当しています。我孫子市の小池さんが言われた「住民が市民に変わる」という言葉は、非常にいい言葉なので、パクらせていただこうと思います。現在市民参加条例に携わっています。その中で、NPOということだけでなく、住民が自ら課題を解決していこうという姿勢に接してきました。われわれ行政は自治法という住民の福祉を担っていかなければなりませんが、すべてを担えるわけではありません。その中で、自治会やNPOとコラボレーションできないかという考え方で取り組んでいます。自治会をエリア型とすると、NPOは支援型で、これらをコラボすることによって、新しい構築ができないかということを探しています。



伊勢：ひと通り御紹介いただきましたが、もう少し詳しく御紹介いただき、課題を語っていただいた後、その解決について、会場の皆さんも交えてディスカッションを行いたいと思います。最初に、先ほどちょっと述べていただきました、助け合いネットの立ち上げから関わってこられた木村さんをお願いいたします。

木村：今、うちの代表（片岡）がパンフを配布しております。皆様御存じのように、流山市の福祉系の草分けとも言えるユアイネットというNPO法人があり、そこで1年ほど修業をしました。福祉介護系というと、女性の仕事だと思っていましたが、私に回ってくるのは、病院の送迎、大掃除、不用品の処分などの力仕事でした。とてもひとりでこなせる量ではなくなってきましたので、当時のNPO法人流山ユアイネットの事務局長であった片岡さんに相談し、男仕事の福祉組織が必要ではないかということで、男性ばかり16名×5万円の出資で助け合いネットを立ち上げました。その後法人化し、公民館5ヶ所で説明会を開催、合計250名の参加者を得、そのうち100名に加盟していただきました。4割の加盟率になります。いかに男性が、ボランティア、市民活動に関心を持ち始めていたかがわかります。会の理念である「できることを、できる時に、できるだけ」の精神を実現するために、当時流山市ではあまりなじみのなかった「有償のボランティア」、「互助型」のNPOの活動を始めました。現在は会員約800名で、助けてい側の提供会員が約300名、助けて欲しい側の利用会員が約500名です。年間の活動時間は毎年1割以上の増加で、H23年3月期（H22年度）の活動時間は8,500時間に達しています。素晴らしいスキルを持った会員が多くおられ、これらの会員に対する雇用の提供の場にもなっていると言えます。決算は毎年赤字であります。ミッションを達成させるために、私の場合は指定管理者の業務受託で市民活動推進センターに勤めています。

伊勢：今、流山市の事例を話していただきましたが、今度は松清さんに柏市の事例を御紹介いただきます。

松清：私はもともと建築設計関係で東京に勤めていました。その後思うところがあり、福祉介護関係の仕事を行い、それが足場となって地域との接点できました。地域にいたることが長くなったところで地域の環境関係の団体と関わるようになりました。そのような中で、行政の考え方が分かるような立場が培われたようで、たまたま現在の仕事に対して私に白刃の矢が立ったようです。その関わった環境系の活動の中で、2つ事例を紹介します。

ひとつは今年で4～5年になる手賀沼のガイドボランティ

アという活動です。柏市の小学校41校のうち、30校が課外活動として毎年手賀沼を船で見学しますが、従来は柏市環境保全課の職員がガイドを行っていました。職員は知識はありますが、子供に対する思いやりの面でも形式的になってしまうということで、もっと思い入れが深く、積極的に手賀沼をアピールしたいと考える市民にガイドをしてもらいたいというのがこの事業の契機です。この養成講座は最初40名集まり、現在実働数は60名となっています。現在柏市の方は、現場実務は完全にガイドボランティアの方に丸投げで、そのガイドに謝礼金を支払うということに関わっているということになります。



もうひとつは、手賀沼森友会という森林整備団体です。柏市には約900haの森がありますが、この緑を残す方法について市民の方たちと勉強会を行いました。国の森林法に基づき森林施業実施協定という仕組みがあります。これによると、NPOでも地権者と協定を結び市長が承認することによって森林整備作業（機材費、労務費など）に補助金を出すことができます。これに基づき、約40ha、50人の地権者と協定を結び、森林整備をしています。この補助金事業は整備をすることが目的なので、整備後の利用については地域の人、学校などが引き継ぐこととなります。手賀沼森友会自体は整備団体、きこりの集団であり、整備する人のモチベーション高揚、思いを伝えていくことが目的ですが、整備後に再び木が育つのは20年後くらいなので、現在のシニアの参加者には結果は見えず、その思いを目にどのように見える形にするかが課題と言えます。



伊勢：それでは、我孫子市もユニークな事例が多くあると思います。その中から1~2御紹介ください。

小池：それでは天王台ふれあい夏祭り実行委員会の事例を紹介いたします。これは法人格は持っていない非営利団体で、目的は地域住民のコミュニティ作りと防犯・防災です。これは、それまでであった商店、5つの自治会、企業のそれぞれの活動を、天王台という地域活動として1人の発起人がきっかけとなってとりまとめたものです。今まで個々にやっていた活動が合同で行われることにより、地域内でお互い同士の顔が見えるようになってきました。例えば、東京に勤めている会社員も地域にかかわるようになり、その地域に住んでいてよかったと思えるようになってきました。

伊勢：次は、松戸の事例を小山さんをお願いします。



小山：松戸市民活動サポートセンターと、NPO COCOTの事例をお話します。今までお話しされた柏や我孫子の事例は、地域活動に携わっておられる方が課題と考えるテーマ、場面において活躍されているというお話しでしたが、松戸市民活動サポートセンターは地域課題を持っているその人たちを応援することが目的です。直接センターのスタッフが現場に飛び込むのではなく、一步引いた形で応援するということです。その頑張っている人たちが、自分たちだけでは頑張りが足りない場合、プログラムを作るとか、人材を探すとか、団体同士を引き合わせるとか、アイデアを出すとかといった応援をすることです。COCOTの活動もよく似ています。例えば大震災の被害を受けたいわきに、炊き出し、運送、力仕事などのスキルは持っていて応援をしたいが、その方法が解らない、情報、行政との交渉力などが無い、そういう方々に対し応援をすることです。つまり、モノやヒトはあるが、やり方の解らない人に対して仕組みを作る、背中を押すという役割です。そういう仕事は中間支援組織というのでしょうか、そういう組織・

部署同士が上手くつながっていくような仕組みを構築できればいいと考えています。

伊勢：それではひとりパネラーの方のお話を伺いましたので、今度は会場の方々からの御質問、御意見をお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

片岡：小池さんにお伺いします。先ほどの天王台ふれあい夏祭り実行委員会の事例で、中心になっているのはNPOですか？

小池：天王台ふれあい夏祭り実行委員会自体がNPOです。NPO法人ではなく任意団体です。

片岡：自治会連合会的なものがNPO的な活動をやっているということですか？

小池：商店も入っているのですが、自治会連合会的というよりも、むしろ大げさではあるが地域協議会的と言えるでしょう。商店で防犯的な活動をされていた2人の方がいて、高齢化地域とそうでない地域のそれぞれ異なる課題を持つ地域のまとまりを作りたいと考えたのが発端です。

伊勢：片岡さんは自治会のお祭りのプロで、流山市のお祭り活動は盛んですが、天王台の事例は、自治会の枠を超えて組み立てて行き、そこに商店、企業が加わり、結果的には協議会的なエリアを押さえる大イベントとなっていったという特徴ある事例だと思います。他の御質問はいかがでしょう。



木村：我孫子市の事例は、行政としてはどのような支援の仕方、どのような形の庁内調整を行うことができたのでしょうか？

小池：実行委員会立ち上げの段階においては、行政側

は調整に関わってはいません。むしろ、市民の方が市民活動支援課に来られたり、直接それぞれの担当部署に行かれたりして動かれました。行政側の支援というと、我孫子市の公募補助金を年間18万円出しました。それ以降は、他部署からいろんなものを借りたり、相談をしたりということはありませんが、積極的な庁内調整というほどのものではありません。

榎：松清さんに伺います。森林施業実施協定においては、行政側とか中間支援組織が地主とのつなぎをやったのでしょうか？

松清：最初の段階では行政側が地主さんとの接点を持ったし、3年間程度は県の森林課農林振興センター（現在農業事務所）の専門指導員に間に入ってもらいました。その後市議員に紹介してもらったりということもありましたが、現在はわれわれが50人くらいの地権者の方々と直接交渉をしています。

榎：地権者さんからの抵抗などはありませんでしたか？

松清：基本的には、地権者さんにとって何のデメリットもない事業プログラムを作りました。つまり、地権者さんには何の負担もありません。彼らは何もしなくても、我々が入ることによって森がきれいになる、きれいになったところで、あらためて提案する、例えば杉や竹を切った後にシイタケ原木としてのクヌギを植えるとかの提案をする、そのようなプログラムでやってきました。

拝島：成功事例ばかりではなく、「思いがかなわず」的な失敗事例はありませんか？

松清：最初投げかけた時に周囲の皆さんがどういう反応をするかによって、なくなるものというのは大体わかります。一番失敗しやすいのは、突っ走ったときです。思いが強いことは必要ですが、一方で周囲の反応を冷静に見る目が必要です。その思いと冷静さを持って誰が仕掛けるかが重要です。サポートセンターは情報とかつなぎとかを行う位置づけにあり、仕掛けの役割を担うものではありません。

小池：失敗事例ではありませんが、最初同じ思いで立ち上がったものが、何が合わなかったのかわかりませんが、分裂してしまったという事例があります。今はそれぞれ同じような活動をしているのですが、今でも仲が悪いです。



松清：「思いがかなわず」で一番失敗しているのは、それが地域の実態と乖離していても気がつかないという事例が多いんです。

小池：行政がかかわって立ち上げた場合は失敗が多いと思います。

(?)：先ほどの、プロジェクトによる調査報告において、松戸のテント小屋の事例で、「当初はNPO方式で運営したが上手くいかなかった」とおっしゃいましたが、具体的にはどうして上手くいかなかったのですか？

魚住：いろんな人が入ってきて、お互い同士の組み合わせで上手くいかなかったのではないかと記憶していますが。

伊勢：私の記憶では、あまりにも公平にいろんな人の意見を聞いて、整理できなくなったということだったと思います。ですから、本当にやりたいという人の一本釣りの方がよかったのではないかとニュアンスではなかったかと・・・

小山：それはちょっと違います。単独のNPOに事務局を任せたことにより、そのNPO色が強く出すぎて不満が相次ぎ、そのために協議会方式になったんです。一本釣りというのは、その協議会のメンバーを募る時のお話です。

伊勢：報告書の「NPO方式」という表現がよくなかったと思います。

伊勢：それでは課題に移ります。パネリストでも会場の方でも結構です。挙手をしてご発言ください。

小池：NPOの課題として、資金不足、人材不足は当たり前なのですが、代表者の思いが強く、そのカラーが出過ぎて、若い人が入ってこれず、硬直化してしまうということがよくあります。NPO=その代表者の顔というような場合ほど、その傾向が強いようです。

小山：私は、逆にそれはNPOの良さだと思っています。思いの強い方に共感して入ってきている人たちの集まりだからこそNPOであると思います。

伊勢：小池さんの「カラーが出過ぎない方がよい」というお考えと、小山さんの「思いが強ければNPOではない」というお考えとは相反するものではないし、両方成立すると思います。そのあたりのもう少しの深掘りを松清さん、お願いします。

松清：小山さんの言われるように、「まず思いあり」だと思います。要は、ミッションを達成するために、組織になった時にどう運営していくかです。運営に際しては、一つのパターンに固執するのではなく、大きなミッションは変えずに、実現達成のためのスタイルは柔軟に変える姿勢を持つことが重要だと考えます。

片岡：小山さん、松清さんの「まず思いあり」のご意見に賛同します。さらに、NPO運営面の経験者として一言いわせていただければ、思いの強さだけでなく、そのミッションがその地域に本当に必要かどうかが重要であり、それが無いと長続きしません。さらに、多少の考え方の違いはあれ、最低限、ミッションに対する参加者のベクトルが合っていないといけない、そうでないと、玉石混合になる可能性があります。

小山：人材育成の観点からは内部から育てていくことになりませんが、それと同時に、外部の共感者、ステイクホルダーの枠をどれだけ広げていくかが重要だと思います。そうすることで、個人の思いが個人でなくなり、もう少し開かれた公共性ある組織となります。次に自分の思いが地域のニーズと如何に合致しているかどうかということと、それが事業性をどの程度持つかという観点が必要です。地域から湧き上がってくるニーズを、共感する人たちが支えて行くのがNPOだと思います。役所は、地域の課題を政策として解決していく役目を負っていますが、NPO側は、自分たちのミッションがその役所の政策に合致すればラッキー程度に考えておくべきでしょう。

松清：少し補足しますが、行政が音頭を取った場合、行政の傘に元に動くことに慣れた人は、どうしても行政に要求し、頼ることばかりしてしまいます。例えば、カレッジ講座という優れたカリキュラムを進めていますが、参加した学生たちは、その大学の域を超えられない、そこで学んだことを、自分の力で自分の地域に働き掛けてやって行こうという人はほとんどいません。同様に、経済成長期には、行政がお金で何でもやってあげますということをやってきて、住民はやってもらうことに慣れてきた、行政側は、そのように行政に頼ることに慣れた人たちを突き放すことも必要だと思います。

伊勢：ちょっと整理しますと、「思いかなわず行き詰まる」ということに対しては、ミッションは必要だがそれがニーズに合うかがどうかが重要、運営面では思い入れの強さが人によって異なるが、参加者のミッションの方向性が合っていることが必要、ボランティアは行政が主導ではなく参加者自らが考えるものである（ボランティアは強制的な徴兵制ではなく自発的な志願兵である）という3点だと思います。他に、課題、マネジメントの工夫などご意見がありますでしょうか。兼子さん、そろそろいかがでしょうか。

兼子：自治会も高齢化、後継者不足の課題を抱えているのはNPOと同様であると思い聞いていました。自治会の場合は、これに加えて未加入者の問題をどうするかが課題です。こう言いながら、その解決策を持ち合わせていないのが正直なところですよ。

木村：兼子さんの言われるように、高齢化、後継者不足は私の属するNPOでも痛切に感じています。私も40を過ぎた（20年ちょっと前に）今になって、思いの近い（ミッションの類似する）若年の人たちの団体とできるだけ交流を深める必要があり、できれば若い人たちの団体に吸収してもらえるのがよいと思っています。高齢者側のメリットは、自分達のミッションを若い人たちのニーズに合った形で後継者に引き継げること、若い人たちのメリットとしては、自分達にはない貴重な経験や時には物的資産を得られることだと思います。しかし、前に言われたように、先輩方の「思い」が強すぎて上手いかなくなることには注意しなければなりません。

松清：ミッションについては固定的なものだと思えない方がよいでしょう。ミッションは世代交代の時だけでなく、定期的に見直すことも必要です。同じような意味で、若い人が町会（自治会）に入らないという

問題がありますが、町会に入るメリットは何か、何故全員が入らなければならないかなどの町会に入る意義の議論を改めてやることも必要です。例えば、今回のような大震災に備えた防災計画はコミュニティ単位で実施して行かなければならないというようなことをテーマとして。

木村：「住む」というだけなら地域コミュニティとの関連は不要との考えもありますが、子供や高齢者のおられる家庭は、地域コミュニティとの連携、協力が重要だと思います。

伊勢：そのメリットがあると思っている人は自治会に入ってくると思います。そう思っていない人に対して、そのメリットを如何に目に見える形にするか、理解させるかが重要だと思います。時間も無なくなってきましたが、多少過激な意見でも結構ですので、会場で何か意見、ご質問はありませんか。

清水：パネラーのどなたでも結構ですが、NPOのメンバーの中には、意見や批判をするだけで自分は何もしない、逆に運営上の妨げになる（と考えられる）ような方が時々います。そのようなメンバーにはどのように対するべきとお考えでしょうか。

小山：確かに、過去の経験・地位を引きずって、ここに来れば自分の高邁な理想を、金をもらって実現できると考えて来る方がいます。そういう人は、基本的には排除はしません。そういう方には、市への申請書へ署名してもらって箔付けや、知り合いの偉い人を紹介してもらおうとか、その人の自尊心を利用するようなやり方でおだてるようにしています。逆に、若い人たちに対しては、「ここは貴方達の自己実現の場ではない」というように厳しく接するようにしています。どんな立場の、どんな考えの方にも、それぞれに合った役割を与えてあげるのがNPOであると思っています。なかなか理想通りには行きませんが。

小池：組織としての役割分担の問題はありますが、NPOなのでどんな人にも場を作ってあげる必要があるのではないかと思います。

伊勢：害の無い人には、こちらが懐を深くして、会費を払ってもらうだけでいいと考えればよいでしょう。もしその人がいることによって害が出るのなら、それは組織そのものに問題があるとの考え方もあります。

恵良：かなり時間もすぎましたが、今日のタイトルの「NPOがまちを変える」というテーマに沿った議論が、あまりなされていないように思います。今回の大震災などで、NPOが大きく役割を担っている事例もありますので、タイトルを見て期待してきた人たちに失礼の無いように、懇親会ではもっとそのあたりを突っ込んだ議論を期待します。

高橋：先ほどの「害になりそうな人」に関連して、あるNPOの事例をお話しします。歴史の話が好きで、いつも若い人たちに自分のその歴史の話をひけらかす高齢者の方がおられました。うちのNPOのメンバーの方々は非常に許容力があり、最初は自然、環境、景観という観点からばかり見ていたのが、歴史的観点から地域を考えるようになりました。また、リーダーも、その方に次から次へと歴史に関する調査のリクエストを出という、自己満足感、自尊心をくすぐる方法を取り、上手く行っています。

伊勢：時間になりましたので、あと1名の御意見を伺いますが、先ほど、うちの事務局長（恵良）が、「500円とってるんだから、もっとタイトルに沿った議論をしろ」というプレッシャーをかけられました。ですから、このタイトルに沿ったお話を、パネラーの方々から最後に1分ずついただきます。それでは最後の方の御意見を伺います。

磯野：キャップ菜の花という子供への暴力防止プログラム関連のNPOに参加しています。先ほど、ニーズに合ったミッションというお話がありました。私たちは子供たちと接し、子供たちのニーズは把握していますが、それが必ずしも大人達、社会全体のニーズとなっていない、つまり、子供たちは必要だと思っているが大人たちはそのようには感じていない、こんな場合はどうしたらいいのでしょうか。

小山：子供のニーズを解っているかと言われれば、当事者じゃないので解らないとしか言えません。しかし、子供のニーズをどういう風に調査をし、吸収して活動に反映して行くかとことで考えれば、できると私は言えます。

伊勢：この問題はちょっと難しく、時間の無い今は十分議論し尽くせないので、懇親会でまたお願いするとしまして、それでは最後の一言ずつをお願いします。

兼子：私どもは行政として、福祉が重要な問題ですが、行政だけでは十分ではなくNPOや住民の方々の力が必要

だということを、今日あらためて痛切に感じました。

木村：皆さん、それぞれの立場で一生懸命やっておられるがゆえに、周りが見えなくなることがあるというようなお話でした。「周りが見えるように」ということを目的のひとつとした6月のイベントのビデオを懇親会の時に流しますので、ご覧下さい。

小池：行政が担えなくなったからNPOがやるということではありません。「NPOがまちを変える」というテーマですが、我々行政の方もぜひ変えて頂くようお願い致します。

小山：「変える」という言葉を考える時、私はいつも、相手に変わってもらいたい時はまず自分が変わらなければならないと思っています。「NPOがまちを変える」という場合、協働の中で、お互いに関係性を変えて行くということだと思います。

松清：先ほどの磯野さんのお話ですが、私は子供の二-

ズが無視されているとは思いません。NPOにはシニアの方が多いのでそのように見えるだけだと思います。次に市民側の不満、不安に対して、行政は政策の枠の中で動くことしかできません。不安、不満の解消が出来るのは市民側です。だから、われわれコーディネータは、自分のやりたいことをやっても意味がない、そういう意味では、市民のレベルに合った行政、支援組織になっていくべきだと思います。

片岡：NPOの先輩として一言だけ言わせて頂くと、「NPOがまちを変える」ための原動力は、協働であるということです。

伊勢：皆さんありがとうございました。それでは、この続きは懇親会で・・・

この後、パネリストも含めてほぼ参加者全員で懇親会が行われ、伊勢理事長が仕入れてきた東北のお酒や紙田さんが現地から運んでくれた東北のお菓子などを楽しみながら、にぎやかに議論が続きました。

まちネット流山第7回通常総会のご報告

7月30日、市民活動推進センターにて、まちネット流山の第7回通常総会が開催されましたので簡単にご報告いたします。

当日は、個人会員30名、団体会員9名、合計39名の内、出席14名、委任状8名の22名の参加がありました。

22年度の事業報告、会計報告、および23年度の事業計画、予算案が審議され、すべて原案どおり可決されました。

昨年度は「次の自立ステージに向け活動を展開する時機。提案力及び実行力をつけ新たな協働関係構築に向け歩みだす。中間支援組織としての原点を捉える活動方針」を提案し、活動致しました。

会員皆様及び関係者、参加者のご支援のおかげで、大きな進展があったと考えております。更にNPO

が活躍できるよう、今年度は下記のような事業を展開して行きたいと思っております。引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

- (1) 市民活動の意義や有用性、市民活動がもたらす効用等に関して調査研究を行います。
- (2) まちづくり人養成学校開設の準備を行います。
- (3) 地域課題及び市民活動の発掘、市民活動団体の交流を促進します。

総会の後、例年どおり会員どうしの懇親会が行われました。今年も早川農園のミニトマトをおいしくいただきました。早川さん、いつもありがとうございます。



《編集後記》

今回のまちネットフォーラムは、近隣市の市民活動家の元気のお話が伺えて、おおいに刺激になりました。お昼の固い意見交換だけでなく懇親会でのざっくばらんなお話がよかった。また、やりましょ

う。
(か)

発行：まちネット流山

【事務局】事務局長 恵良 好敏気付

流山市駒木545-4

TEL/FAX : 04-7154-6788

E-mail : yera@nifty.com

【発行日】2011年9月25日